

神の似姿としての人間本性

－アキナスにおける神秘主義の可能性－

佐々木 亘

Human Nature as an Image of God
－Possibilities of Mysticism in Aquinas－

Wataru Sasaki

アキナスは、似姿の類似性は、人間本性のうちに、神を受容し得る者であるということにそくして、すなわち、認識と愛という固有な活動をもって、神自身に触れるということから認められると言っている。神を受容するということは、人間が神の似姿としてのはたらきを通じて神に触れることから可能になる。人間が神に触れるというはたらきは、人間の神の似姿としての自然本性にそくして成立している。かりにまったく恩恵がない状態—このような状況は、理論上は考えられても、逆に現実的ではないであろう—であっても、この神を対象とするはたらきは、人間の自然本性にそくして認められなければならない。かくして、アキナスの体系は、その出発点からして深い神秘の中にある。神が人間によって、認識され、欲求され、愛され、触れられ、達せられるということは、我々にとって考察のゴールではなく、出発点なのである。「神とともに歩む」ということは、ある特別な聖人にだけ許された生き方ではなく、すべての人間に開かれた生き方となるのである。

Key Words: [アキナス] [神秘主義] [神の似姿] [神への接触]
[神への受容能力]

(Received September 24, 2021)

はじめに

前回、「吉満義彦における神秘論の可能性－近代の超克とアキナス、そしてAI－」というタイトルの論文を発表したが⁽¹⁾、これは神秘主義については初めての論考である。神秘主義とは何か、そもそも神秘とはどのようなことを意味するのか。これらは、簡単に答えることができない深い内容を有している。本稿では、「神自身に触れる」というトマス・アキナスの思想の解明から、この神秘を探求する。

* 鹿児島純心女子短期大学生活学科生活学専攻現代ビジネスコース（〒890-8525 鹿児島市唐湊4丁目22番1号）

I. 神秘主義とは何か

そもそも、「神秘主義」とはどのような思想なのであろうか。鶴岡賀雄は、神秘主義を「その曖昧自体がつねに問題化してくる言葉／概念である」と言っている⁽²⁾。たしかに、「神秘」と言っても、低俗なオカルトから高度な宗教的境地まで幅広く、簡単には定義できない。しかし、ある程度の言明は可能であろう。深澤英隆は『哲学中辞典』の中で、次のように言っている。

語源となる *mystike/mystical* は、元来古代の秘儀宗教と関わる語彙であり、その後は否定神学＝神秘神学や、聖書に秘められた意味を表す語であった。(中略) 19世紀以来人口に膾炙した神秘主義の概念は、何らかの神秘的・脱我的体験において神や絶対者に触れ、あるいはそれらとの合一の経験を得、それに基づき神や実在についての直接知を獲得するに至る宗教性・宗教実践を表す。(中略) また諸伝統の神秘主義は相互に著しい類似性をもつとされ、キリスト教神秘主義、イスラム神秘主義、ヒンドゥー教神秘主義等々の本質的一致、ということが語られる。(中略) このように、神秘主義の観念は近代以降、世俗化と伝統的宗教の失墜を補完する、エキュメニカルで文化批判的な意味合いをもって用いられてきた⁽³⁾。

否定神学とは、「神は〇〇ではない」と言う仕方で、神の概念を否定的な仕方で規定しようとする神学である。また、聖書が象徴的に解釈される場合は、まさに神秘として解されよう。さらに、後に見るように、「神に触れる」という思想はアキナスのうちにも見いだされる。自然と超自然、時間と永遠の垣根を超えて、「神や実在についての直接知を獲得する」と言う神秘体験へと開かれた宗教性が神秘主義として捉えられよう。そして、そのような超自然への開きにおいては、各宗教における相違が容易に捨棄されることは十分に予想されることから、「諸伝統の神秘主義は相互に著しい類似性をもつ」とされるのであろう。近代以降、世俗化の波が押し寄せ、そのため「伝統的宗教の失墜」を招いたが、神秘主義はそれを補完する役割を担っている。どんなに自然科学が発達しても、いやむしろそのような状況だからこそ、人間の宗教性は神秘という言葉のうちに端的に表現されるのである。

この「エキュメニカルで文化批判的な意味合い」と言う点は、特に重要であろう。自然科学が万能であるような幻想の中、経済効率に駆り立てられる我々にとって、神秘主義は諸宗教の垣根を超え、人間本来の超越性が担保される場を提供しているとも言えよう。鶴岡は、19世紀末からのカトリック系神秘神学の隆盛について、次のように言っている。

いわゆるアリストテリコ・トミズムが久遠の哲学 (*philosophia perennis*) としてカトリック神学の不動の基軸の位置を与えられたことを受けて、トマス・アキナスの理性主義的哲学・神学に、アウグスティヌスや、とくにアビラのテレサ、十字架のヨハネら、近世スペインの神秘家の思想が接合されて、スコラ学的言語による形而上学の堅固な知的構築に、神秘家たちの情念的体験言語によって内実を与えることが目指されている。17世紀のドミニコ会のヨハネス・ア・サンクト・トマらに拠るジャック・マリタンやガリグウ＝ラグランジュの仕事が代表的である⁽⁴⁾。

アキナスの思想は、徐々に受け入れられ、やがて「久遠の哲学としてカトリック神学の不動の基軸の位置」となっていく。そこで、カトリックの神秘神学としては、アキナスの理論的体系、すなわち「スコラ学的言語による形而上学の堅固な知的構築」に、神秘主義の思想家の思想が「接合」され、「神秘家たちの情念的体験言語によって内実を与えること」により、アキナスの思想が新しいカトリックの神秘主義を形作ることになるのである。20世紀を代表するトミストであるマリタンは、アキナスと神秘主義を結びつけたのであり、スコラとミスティクの深い結びつきは注目に値する。

Ⅱ. 神に触れること

では、アキナスにおいて、「神に触れる」ということはどのように語られているのであろうか。アキナスは、『神学大全』第三部でまずキリストの受肉について論じており（第一問題～第二六問題）、その第四問題では、「受容される側からの合一」が問われている。すなわち、人間本性から見たところの神のペルソナとの合一についてである。その第一項では「人間本性は、ほかのいかなる本性よりも神なる御子によって受容されられるべきであったか」を問題としており、その第二異論解答で次のように言っている。

「似姿 (imago)」の「類似性 (similitudo)」は、人間本性のうちに、「神を受容し得る者 (capax Dei)」であるということにそくして、すなわち、認識と愛という固有な活動をもって、神自身に「触れる (atingere)」ということから認められる⁽⁵⁾。

すべてのものは、神によって創造されているかぎり、そこに何らかの仕方で「神の類似性」が認められる。その中で、人間のうちに似姿という特別な類似性が見いだされ、神の似姿であるということから、神に対する「受容能力 (capacitas)」が成立し、人間の完成はかかる受容能力によって可能になる⁽⁶⁾。

さて、「認識と愛という固有な活動をもって、神自身に触れるということ」とは、そもそものようなことを意味しているのであろうか。似姿という類似性は、人間において、その理性的本性の固有なはたらきにそくして認められる。それが、「認識と愛という固有な活動」である。さらに、神の似姿であることから、人間は「神を受容し得る者」となる。かかる能力は現実的な受容を可能にする受容能力である。したがって、人間が神を受容し得る存在であるかぎり、人間は何らかの仕方で神に触れていることになる。

もちろん、神の似姿としての類似性には、自然本性的な似姿から超自然本性的な似姿にいたるまで、その完成に関する段階的な区別が認められる⁽⁷⁾。しかし、ここではもっとも一般的な人間の自然本性にそくした似姿としてはたらきが語られている。

そもそも神を受容するということが成立するためには、神が認識と愛の対象として捉えられていなければならない。すなわち、かりに単なる能力におけるような、可能態にそくした状態であったとしても、「人間本性のうちに、神を受容し得る者であるということ」が成立するためには、その受容を可能とするような仕方で、「認識と愛という固有な活動をもって、神自身

に触れるということ」もまた成立していなければならない。

したがって、「人間が神を受容する」ということと、「人間が神に触れる」ということは、同じ状況を意味していると考えられる。どちらも「神を認識し愛する」ということから可能になる。かかる認識と愛は、たとえばそこで人間と神とのパーソナ的な交流が見いだされるような高度なはたらきではなく、神を神として認識するような認識でも、神を神として愛するような愛でもないであろう。

というのは、神はすべての根源であるから、万物のうちに根源としての神が認識され、同時に、神はすべての目的であるから、万物のうちに目的としての神が欲求され、愛されるということは、いわば原理的に成立しなければならないのである。このかぎりにおいて、アキナスの思想体系は、まさに神秘主義なのである。

Ⅲ. 神の似姿としての人間の本性

では、先の第四問題第一項主文では、どのような議論が展開されているのであろうか。アキナスは次のように言っている。

何かが受容され得るということは、神のパーソナによって受容されるのがふさわしいという意味で言われる。しかるに、この適性は自然本性的な受動能力にそくして解することはできない。その能力は自然本性的な秩序を超えたものには及ばないが、被造物の神に対するパーソナの合一はこの秩序を超えているからである。それゆえ、何かが受容され得るということは、先の合一への適合性にそくして言われる。ところで、この適合性は人間の本性のうちに二つの仕方でも認められる。すなわち、尊厳性と必要性にそくしてである。尊厳性に関しては、人間本性が、理性的で知性的であるかぎり、自らのはたらきを通じて、すなわち御言を認識し、愛することによって、何らかの仕方でも御言に達するよう生まれついている。また、必要性に関しては、原罪のもとにあったので、修復を必要としていたのである。この二つのことは、ただ人間本性にのみ適合する。というのは、非理性的被造物には尊厳性という適合性を欠いている。これに対して、天使の本性は必要性という適合性を欠いている。それゆえ、ただ人間本性だけが受容され得るということになる⁽⁸⁾。

ここでの「受容」とは、神のパーソナが人間の本性と「合一」することによって成立する。そもそも、神のパーソナが人間本性と合一するということは、超自然による自然へと絶対的な介入を意味しており、神秘以外の何ものでもない。そのため、「何かが受容され得るということは、神のパーソナによって受容されるのがふさわしいという意味で言われる」。神のパーソナによって受容されるのが適切であるところの本性が問われる。

しかるに、「被造物の神に対するパーソナの合一」は、「自然本性的な秩序を超えたもの」であるから、「この適性は自然本性的な受動能力にそくして解することはできない」。何かが受容され得るという適性は、受動的な能力ではなく、より能動的な能力にそくして認められる。「それゆえ、何かが受容され得るということは、先の合一への適合性にそくして言われる」。何が

受容されるべきかは、神のペルソナとの合一に適合しているか、という点から決定されるのである。

そして、「この適合性は人間の本性のうちに」、「尊厳性と必要性にそくして」認められる。この尊厳性が、先に見た神の似姿としての類似性である。かかる似姿は人間の理性的本性において、その固有なはたらきにそくして認められる。そのため、「御言を認識し、愛することによって、何らかの仕方で御言に達する」ということが「生まれついている」のである。かかる「御言への到達」が、「認識と愛という固有な活動をもって、神自身に触れる」ことに他ならない。ただ、ここでは御言としてのペルソナとの合一が問題にされているため、「何らかの仕方で御言に達する」と言われているのであろう。

一方、「必要性に関しては、原罪のもとにあったので、修復を必要としていた」。人間の罪が贖われ、神と人間の関係が回復するということは、その償いを神によって、と同時に、人間によってなされなければならないことから、真の神にして真の人間であるキリスト以外には不可能である⁽⁹⁾。

したがって、「この二つのことは、ただ人間本性にのみ適合する」ことになる。人間は、上位の天使と下位の非理性的被造物から区別されるが、非理性的被造物は神の似姿としての類似性を持たないことから、「尊厳性という適合性を欠いている」。これに対して、天使は人間のよう選択を繰り返すことがないから⁽¹⁰⁾、「必要性と言う適合性を欠いている」。そのため、「ただ人間本性だけが受容され得るということになる」。

おわりに

人間が「神を認識する」、「神を愛する」、「神に触れる」、「神に達する」、これらのはたらきは何か超越的な活動として捉えられるかもしれない。もちろん、自然本性という我々にとって原初的な状態から、恩恵や栄光にもとづく超自然本性的な完全な段階まで、各々のはたらきには段階的な区別が認められる。しかし、かりにまったく恩恵がない状態—このような状況は、理論上は考えられても、逆に現実的ではないであろう—であっても、これら神を対象とするはたらきは、人間の自然本性にそくして認められなければならない。

かくして、アキナスの体系は、その出発点からして深い神秘の中にある。神が人間によって、認識され、欲求され、愛され、触れられ、達せられるということは、我々にとって考察のゴールではなく、出発点なのである。とすると、人間の人生の意味もまた違って見えるだろう。「神とともに歩む」ということは、ある特別な聖人にだけ許された生き方ではなく、すべての人間に開かれた生き方となる。神の内在と超越の意味が一人一人に問われるわけである。

註

- (1) 佐々木2021 a。
- (2) 鶴岡2017, 1頁。
- (3) 深澤2016, 638-639頁。

- (4) 鶴岡2017, 14頁。
- (5) *S. T. III, q. 4, a. 1, ad 2. similitudo imaginis attenditur in natura humana secundum quod est capax Dei, scilicet ipsum attingendo propria operatione cognitionis et amoris.*
- (6) 似姿や受容能力の意味に関しては、佐々木2005参照。
- (7) アクィナスは、『神学大全』第一部第九三問題の第四項で、「神の似姿はいかなる人間のうちにも見出されるか」を問題にしており、その主文で次のように言っている。人間は、その知性的本性にそくして、神の似姿へと存していると言われるのであるから、知性的本性が最高度に神を模倣することができるという、そのかぎりにしたがって、最高度に神の似姿へと存している。しかるに、知性的本性が神を最高度に模倣するのは、神が自らを知性認識し、愛するということに関するかぎりにおいてである。それゆえ、神の似姿は、三通りの仕方、人間のうちに観られ得る。一つには、神を知性認識し愛することへの自然本性的な適性を人間が有するかぎりにおいてである。そして、かかる適性は、すべての人間に共通であるところの、精神の自然本性そのもののうちに成立している。もう一つには、人間が現実態か能力態によって神を認識し愛するが、しかし不完全な仕方によるかぎりにおいてである。これは恩恵の同形性による似姿である。第三には、人間が神を現実態によって完全に認識し愛するかぎりにおいてである。この場合、栄光の類似性にもとづく似姿が認められる。(中略)それゆえ、第一の似姿はすべての人間のうちに、第二の似姿は義人のみに、これに対して第三の似姿は、ただ至福者のうちに見いだされる。(S. T. I, q. 93, a. 4, c. cum homo secundum intellectualem naturam ad imaginem Dei esse dicatur, secundum hoc est maxime ad imaginem Dei, secundum quod intellectualis natura Deum maxime imitari potest. Imitatur autem intellectualis natura maxime Deum quantum ad hoc, quod Deus seipsum intelligit et amat. Unde imago Dei tripliciter potest considerari in homine. Uno quidem modo, secundum quod homo habet aptitudinem naturalem ad intelligendum et amandum Deum: et haec aptitudo consistit in ipsa natura mentis, quae est communis omnibus hominibus. Alio modo, secundum quod homo actu vel habitu Deum cognoscit et amat, sed tamen imperfecte: et haec est imago per conformitatem gratiae. Tertio modo, secundum quod homo Deum actu cognoscit et amat perfecte: et sic attenditur imago secundum similitudinem gloriae. Unde super illud *Psalmi*. 4, [7], Signatum est super nos lumen vultus tui, Domine, Glossa distinguit triplicem imaginem: scilicet creationis, recreationis et similitudinis. –Prima ergo imago invenitur in omnibus hominibus; secunda in iustis tantum; tertia vero solum in beatis.)
このように、神の似姿には、自然本性の段階、恩恵による段階、栄光による段階の三段階が区別される。それは、範型である神への認識と愛というはたらきに関する完全性にそくした区別である。
- (8) *S. T. III, q. 4, a. 1, c. aliquid assumptibile dicitur quasi aptum assumi a divina persona. Quae quidem aptitudo non potest intelligi secundum potentiam passivam naturalem, quae non se extendit ad id quod transcendit ordinem naturalem, quem transcendit unio personalis creaturae ad Deum. Unde relinquatur quod assumptibile aliquid dicatur*

secundum congruentiam ad unionem praedictam. Quae quidem congruentia attenditur secundum duo in humana natura: scilicet secundum eius dignitatem et necessitatem. Secundum dignitatem quidem, quia humana natura, inquantum est rationalis et intellectualis, nata est contingere aliquo modo ipsum Verbum per suam operationem, cognoscendo scilicet et amando ipsum. Secundum necessitatem autem, quia indigebat reparatione, cum subiaceret originali peccato. Haec autem duo soli humanae naturae conveniunt: nam creaturae irrationali deest congruitas dignitatis; naturae autem angelicae deest congruitas praedictae necessitatis. Unde relinquitur quod sola natura humana sit assumptibilis.

- (9) 詳しくは、佐々木2021 b 参照。
- (10) アキナスは、『神学大全』第一部第六四問題第二項で、「悪霊たちの意志は悪において執拗であるか」を論じており、その主文で次のように言っている。人間の自由意思は、選択の前でも、その後でも、対立するもののどちらにも傾きうるが、これに対して、天使の自由意思が対立するもののいずれに対しても傾きうるのは、選択の前であって、その後ではないと言われるのが普通である。このようにそれゆえ、つねに正義に密着している善い天使は、正義において確定されている。これに対して、罪を犯す悪しき天使は、罪において執拗なのである。(S. T. I, q. 64, a. 2, c. Et ideo consuevit dici quod liberum arbitrium hominis flexibile est ad oppositum et ante electionem, et post; liberum autem arbitrium angeli est flexibile ad utrumque oppositum ante electionem, sed non post. -Sic igitur et boni angeli, semper adhaerentes iustitiae, sunt in illa confirmati: mali vero, peccantes, sunt in peccato obstinati.) 天使はたった一回の選択で至福に到達しているため、人間のように救いの必要性がないのである。

文献表

- | | |
|-----------|---|
| S. T. | Thomas Aquinas, <i>Summa Theologiae</i> , ed. Paulinae, Torino: Commerciale Edizioni Paoline, 1988. |
| 佐々木2005 | 佐々木亘『トマス・アキナスの人間論－個としての人間の超越性－』知泉書館. |
| 佐々木2019 | 佐々木亘『トマス・アキナスにおける法と正義－共同体の可能性をめぐって－』教友社. |
| 佐々木2021 a | 佐々木亘・恵子「吉満義彦における神秘論の可能性－近代の超克とアキナス、そしてAI－」『鹿兒島純心女子短期大学研究紀要』第51号, 19-37. |
| 佐々木2021 b | 佐々木亘「キリストの正義－『神はなぜ人となられたのか』における正義論－」『日本カトリック神学会誌』第32号, 105-122. |
| 鶴岡2017 | 鶴岡賀雄「『神秘主義』概念の歴史と現状」『東京大学宗教学年報』第34号, 1-24. |

深澤2016 深澤英隆「神秘主義」, 尾関周二他編『哲学中辞典』, 638-639。

本研究は、科学研究費助成事業（科学研究費補助金）基盤研究（B）「統合的経済倫理学に基づくポスト福祉国家レジームの構築：多元的秩序構想の実践的展開（17H02505）」の助成を受けたものです。